
天使の証明 ~穢れなき瞳~ /休載中

風音 柚樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の証明～穢れなき瞳～／休載中

【Zコード】

Z9550A

【作者名】

風音 柚樹

【あらすじ】

類稀なる賢さを持つシュスの仕事は、死神。大ベテランの彼女は今まで失敗した事がなかった。次なるターゲットは”瀬川ひよの”彼女に会つことで、シュスの道は大きく逸れていく。

prologue (前書き)

天界やら死神やらとファンタジックな単語が溢れでおりますが、ジャンルは”文学”にさせて頂きました。

生や死等について、深く書いていきたいです。

半端なくシリアスになる予定ですので、ご了承下さい。

連載は初投稿です。

多分恐ろしい程のまつたり投稿になってしまつと思ひますが、頑張つて書いていきますので、温かい目で見守つてやってくれるとありがたいです。

「神に、お田通り頂きます」
肩につく程長い真っ直ぐな黒髪を白い紐で束ねた男は、こう言つた。

その男に、十六歳くらいの少女が俯き加減で従つて歩いていく。
この異常な世界を眺める事もしない。ただ、ふわふわとした踏んで
も踏んだ気がしないような地面を踏みしめて、一步一步進むだけだ。
辺りは一面、真っ白だった。穢れは何一つ許さない、そんな白さ。
空気はひやりと冷たくて、少女は肺に痛みさえ覚えた。何処もかし
こも、清潔で、整った感じがした。

しばらく歩くうちようやく見えてきた大きな館だけは、木材そのままの茶色だった。

男がノックをすると、木で出来たドアは乾いた音を響かせた。

「どなたかな？」

「神、私です。いつも通り、お連れ致しました」

田の前のドアが、キイツと耳障りな音をたてる。

「どうぞ、お入り下さい。では私はこれで失礼させて頂きます」

男が去るのを見届けてから、少女は館に足を踏み入れた。

少女は小さな部屋に通された。磨き上げられた窓が一つと、中央に机と椅子が一組、それに向き合つように小ぶりの深緑色ソファが一つ。

「どうぞお掛けなさい」

明るい金の髪を先程の男と同じよう束ねた男に言われ、少女はソファに腰掛けた。

「ここが何処だか、わかるかね？」

男の言葉に、少女が黙つて頷く。肩より少し下辺りまで緩やかに波打ちながら伸びる漆黒の髪が一束、さらりと頬に掛けた。

「ではこれから、いくつか質問をしよう」と呟つ。先ずは、君の名前だが……」

神と呼ばれていたその男は、少女に一、二質問をした。少女は必要以上に口を開く事なく、ひとことで、あることは首を振る事によつて答えた。

「これで最後の質問だ。君は、今まで生きてきた世界について、どう思つ?」「どう思つ?」

少女は右手首をぎゅっと握り締め、視線を床に落とした。

「どう思つかね?」

再び問われ、濃い茶色の目が、神の肩の近くを漂つ。

「私には、わからぬ」

「そうか。わかつた、ありがと。それでは……」

神はおもむろに立ち上ると、少女の目の辺りに手をかざした。

ぶつぶつと小声で何か唱える。

みると、少女の髪に変化が表れ始めた。夜の闇より黒かつた彼女の髪が、鈍い光を発しだしたのだ。本人は何をされているのかわからず、体が石のように動かなくなつて、ただ、きつくる目を閉じている。

不意に神が、手を下ろした。輝くのをやめた少女の髪は、気付けば銀色に変わり、腰の辺りまで伸びている。少女は恐る恐る目を開いた。ほんの数秒前まで茶色だった虹彩の色は、黒に近い灰色になつていた。

少女は焦点の合わない眼差しで、神を見上げた。

「ここが何処だか、わかるかね?」

神は先程の質問を繰り返す。

「いいえ、わかりません」

「ここは、天界 私はここを治める者だ。とにかく、自分の名前は言えるかね?」

「いいえ、あの……申し訳ございません」

少女は銀色に光る髪をさらりと揺らし、頭を下げた。

「いや、謝る必要はない。では、私が名付けてやるつ そつだな、

”シユス”でどうだ？」

「シユス……」

銀髪の少女は、口の中で小さく呟く。

「わかりました」

「よろしい。では、君にこの世界での生活についてを、教えてやら
ねばならないね。ここで暮らすには、先ず最初に、一いつの道のうち
一つを選ばなくてはいけない。天使として、ここに”下界”と呼ば
れる世界の住人を善い方向へ導くか、それとも……」
神の目が、シユスの灰色の目をとらえた。

1・仕事

死んだ人間は、一つの選択を迫られる。天使として、生きている人間達を善い方へ導くか、死神として、人間達の魂を狩りにいくか。一度生前の記憶を消された”死後の魂”は、神の手によって、再び肉体を得るのだ。天使又は死神として働き、その間に生きていた頃の記憶を取り戻す これが、”生まれ変わり”の条件だ。

もちろん死神なんていう氣味の悪い仕事をやりたがる者はほとんどおらず、たいていは皆、天使の道へ進んだ。

それでも、死神を選ぶ者も、少しばはいた。今年で死神生活五年目になる、今までに例を見ない大ベテラン シュスも、そんな変わり者の一人だ。

ふわふわした白い地面の端に降り立ち、シュスは笛に口をつける。ピーンと高い張り詰めた音が響いて、傍に立つ男は耳を塞いだ。着ているスーツから察するに、そこそこ仕事も上手くいき、家庭の方もそれなりに幸せだったサラリーマン、といったところだろうか。

「もう一人来るまで、待つわよ」

耳から手を外した男にシュスが言つたのは、これだけだった。男は落ち着きなく、あちこちに視線を巡らせる。上空に極僅かに漂う雲、道の隅の見たことのない花、ボールを持って飛び跳ねる小さな子供 視界を遮るもののが一切なく、遠くに、殆ど白一色に近い世界が空の青と溶け合つところが見える。溜息をつき、すぐ足元に、地面のない方に向かつてしまがみこんだ。

「本当に天界つてあるんですね。高いな……。こんなに、飛んできただんだ」

「雲の上だから」

シュスの返事はなおざりなものだつた。無邪気にはしゃいでいるように見える男の背中に目を向けると、自然と冷笑が浮かんでしまう。

本当に言いたいのは、そんな事？ そんな事、どうでもいいんじよつ？ こんなところまで来て、まだ聞き分けのいいフリ さつきまであれだけ騒いでいたくせに。そんなにいい子にしてたって、どうせ何も変わらないんだから。どうせ生きて、死んで、また生かされて。だったらもう、やめればいいじゃない。見苦しくわがままでも言い続けていたほうが、よっぽど……。

「本当に」

男は辛うじて聞き取れるくらいの声で呟つた。

「本当に、僕は、死んだんですね……」

「そうよ」

他に何だつていこうの？ そう思つたが、口にしない。面倒だからだ。必要ない。生きたくもないのに生き、死んで、生まれ変わるその無理矢理繋げられた環の中でたまたま出会い、また去つていく人に、無駄な言葉はいらない。

「あ、大丈夫ですよ、こう見えて立ち直りは早いんです。もう平氣」
彼女の短い言葉にいらいらさせたと思つたのか、男はぴょんと立ち上がり、両手をぶんぶんと振つて笑つて見せた。ひょうきんな仕草の影で涙をぬぐつたのも見えたが、シユスに関係のある事ではなかつた。

「お待たせしましたー！」

遠くの方から声が飛んでくる。黒い服、長めの黒髪を白い紙のリボンのようなもので留めた男が駆けて来る。走つてはいるが雲の上だから足音はしないし、足元もしつかりしたものではないのであまりスピードが出ない。

「すみません、別の人のお迎えに行つていたもので」

「別に」

「では、参りましょ」

シユスの扱いには慣れたもので、返事の温度を気にする事もない。死んだばかりの男を引き連れて数歩歩き出してからくるつと振り返り、立ち止まつたままのシユスに、満面の笑顔で言う。

「あ、今回もシユスさんもです。神がお呼びですよ」
シユスも黙つて歩き出した。

「神に、お由通り頂きます」

「神様、ですか？ 本当にいるんですね！ 美智が聞いたら喜ぶだ
うつなあ。ああ、美智っていうのは娘で……」

不意の事故で死んでやつと葬式が済んだ頃だとは信じられないよ
うな和やかな会話が、シユスの耳の傍を通り過ぎていく。

「色んなものが真っ白ですけど、服は黒なんですね」

シユスと髪の長い男の服に由をやる。

「これはその人の仕事によりきりなんですよ。天使をやっている人
は白で、死神は黒。神は白ですね。僕は死神とは違うんですが……」

「リューゼ」

穏やかなまま続していく会話を、シユスの声が、ためらう事もなく遮った。

「私のほかにも、死神はいるの？」

リューゼと呼ばれた案内人は、由を瞬かせた。

「そりゃあいますよ！ 多いとは言えませんが……。どうしてです
？ そんな事、急に」

「初めてだつたから」

それだけで、”リューゼが、呼んだ時に別の死神の仕事に関わって
いた事”について言つているのだと、通じたようだ。

「ああ、それは」

苦笑して言つ。

「みなさん、死んだ方の魂を連れてきて私に引き渡す、なんていう
面倒なこと、最初だけですぐやめちゃいますから。今日私を呼ばれ
た方も、今回の仕事がまだ三回目で……」

「じゃあ一体どうやって？」

途中で腰を折られても、嫌な顔一つしない。

「私はいつも、神のところへ魂を連れて行くだけです。慣れてくる
とみなさん、ご自分で連れて行かれます。そうか、シユスさんはご

存知なかつたのですね、それでもいいと。ではもう今日でお別れで
しうね

「嫌？」

初めて、リューゼの笑顔が消えた。不思議そうな顔になる。

「リューゼは、呼ばれるの、嫌い？」

重ねて問われた彼は、頭を、音がしそうなくらい激しく振った。

「まさか！ それは、私はなるべくみなさんの手伝いをしたいです
し……でも、それがかえつて手間を増やす事になるのであれば……」

「じゃあ、いいじゃない」

何処に、リューゼを呼ぶのをやめる理由がある？

シユスはまた黙り込み、リューゼは今までよりもっと嬉しそうに、元気
笑つた。

リューゼは、周りと違つて茶色の木の扉をノックした。コンコン
ツと、硬く、乾いた音がする。

「シユスさんをお連れ致しました。魂の方も、一緒に」

「どうぞ」

シユスはドアの立てるキイという耳障りな音に、あからさまに顔
をしかめた。リューゼが無言で手を館の中に差し向け、二人を促す。
「失礼致します」

「相変わらず、おまえは仕事が速いね、シユス……。さあ、君、そ
んなにがちがちになる事はない。こちらの部屋で少し待つていて頂
けるかな？」

迎えに出てきた金髪・長身の男 神は、優しく笑いかけて、
“ ”
魂”と呼ばれる男を廊下の途中の部屋に導いた。シユスとリューゼ
は先を歩く神に従い、革靴の柔らかい足音を立てながら廊下の角を
幾つか曲がつた。

「さて、ちょっと早いのだが、また新しい仕事を頼みたくてね」
辿り着いた一番奥の部屋の机から、神は何やら引っ張り出す。

「どうやら、結構な厄介者らしいんだ。実は他の死神に頼んだ事も

あるのだが……」

「失敗、ですか？」

シユスは取り出された紙に目を落とし、名前に目をやつた。“瀬川ひよの”……写真を見たところ、とくに問題がありそうには見えない。長い黒髪は肩より少し下まで真っ直ぐ伸びている。目が大きく、笑顔は利発そうな印象を与えた。

「ああ。しかもそれならまだよくある話なのだが、彼女の仕事に取り組んで挫折したのは、もう三人目でね……。何かに護られてでもいるかのように、いつも”狩り”のタイミングで何かがあつて、逃げられてしまうというのだよ。本人には自覚はないらしいがね。お陰でもう、命日が予定から一ヶ月も伸びてしまった……」

神は本当に困っているようで、はあと息を吐いた。

「わかりました」

「もし一度目が駄目でも、何度かチャレンジするつもりでやつてくれ。おまえ以外に頼める者はいないのだからね」

「はい。私が獲物を捕らえずに終わらせる事は、絶対にありませんから」

シユスの目は、確かに過去から、強い光を放っていた。

「頼りにしているよ。下がつてよろしい」

「失礼致します」

来た廊下を、また靴音を立て、今度は一人で通り抜ける。足音のならない地面に足を踏み出した彼女の頭には、失敗をする可能性など欠片もなかった。

2・失敗

自分自身に魔法をかけ、人間の目に映らないように、物音を立てる事のないようにしてから、下界に下りる。一度死んで魂となつた状態では生きる者の目には見えないが、死神や天使となれば神から肉体を授かるので、姿を見られてしまうのだ。そして神に指示された人間　様々な事情により選び抜かれた、”事故死”させる人間を見つけ出し、あらゆる方法で、命を奪う。その魂を導き、葬式等が一通り終わつたところで天界へ連れて行く。

これまで通りの仕事をするだけだ、失敗する訳がない。

シユスは失敗の事など、考へてもいなかつた。何しろ今までに失敗した事はないのだ。偶然を呼ぶのだか何なのだか知らないが、呼べるものなら呼んでみればいい。その前に、片付けてやる。

ボールで無邪気に遊ぶ子供達が、無言の圧力で、シユスの通り道からどく。シユスはすぐ近くの、雲の切れ目の所に腰掛けた。

魔法を使うには、自分の意思で出し入れができる真っ黒な翼から抜き取つた羽根が必要だ。

先ずは羽を出す前に、ターゲットに関する情報を一通り確認する。シユスは神から受け取つた紙に目を落とした。

瀬川ひよの、十四歳。私立月瀬学園中等部第一学年……。

そこまで読んで、何か引っ掛かるものを感じた。何だろう？　シユスは首を傾げる。

「あつ！」

後方で声が上がつた。ボール遊びをしていた一人が、こちらへ駆けてくる。

「すみません……」

叫ぶような声が聞こえるのと、その子がシユスのすぐ目の前で飛び上がり舞い上がつていたボールをキヤッチするのと、ほぼ同時だつた。キヤッチしなければ、確実にシユスにぶつかつていただろう。

しかしまつと悪い事に、着地の勢いでそのまま倒れ込んでくる。

まだ天使にも死神にもなっていない幼い彼らには、羽はない。体がないため下界の住人には見えないし、もう死んでいるのでこれ以上死にはしないが、一度落ちたら下界まで落ち続ける事になる。バランスを崩したシユースは、子供だけはなんとか天界に押し戻た。自分はそのまま落ちる。空気が物凄いスピード身をこすって走るのを感じる。それはまるで刃のようで、身が切れるように……痛い翼を出して広げると、空気は急に、動かなくなつた。はあと溜め息を吐く。

まつたく、災難だつた。

シユースは手に握り締めていたターゲットの情報の紙のしわを伸ばし、眺めながら、ゆっくりと滑降していく。

住所は、だいたいこの辺りのはずだ。そもそも暗くなってきた事だし、もう家にも帰つているだろう。死神に関係のある事ではないが、ご両親はまだ帰つて来ていらないはずだ。家のつくりを考えれば、”自宅の階段から足を滑らせて、打ち所が悪く……”が妥当な所だらう。

初仕事以来、幾度となく使つてきた手。普段は少し観察をしてから執行するのだが、今回は一気に片を付ける気だった。目的の家を見つけ、一階にあるターゲットの部屋の窓から中を覗き込む。そろそろ冷たくなってきた秋の始めの空氣に、ぶるりと一瞬身を震わせる。

窓は、空氣の入れ替えでもして居るのだろうか、開いていた。こちらに背を向け、一心に勉強机に向かっている少女の姿が確認出来る。

シャープペンシルが机に転がる音がして、少女はうーんと背中を伸ばした。ゆっくり立ち上がり、こちらを向く。

シユースは紙に貼り付けられた写真と見比べる。

間違いない。

何に驚いているのだろう。まるでシユースが見えて居るかのようだ、

立ち上がり、振り向いたままの姿勢で目を見開いて、こちらをじっと見ている。シユスは自分を透かして何を見ているのかも気にせずに、窓をすつとくぐつて、革靴も脱がずに室内に着地した。フロー

リングに靴底がある、「トン」という音がする 音が、する。

何故、音がするのだ？ シユスの脳内はパニックに陥った。下界

に下りる時は、音と姿を消す魔法を掛けているのだ 魔法？

一瞬にして、自分が何をしでかしたのかがわかった。脳から血があつと下がっていくのを感じる。今日は魔法をかける前に、子供をかばつて落ちてきてしまったのだ。足元の地面が何処か知れない所に吸い込まれ、落ちていく。瀬川ひよのは、本当に偶然を 奇跡を呼んだのだ……。

「誰？」

視線が絡み合い、痛みを感じ始めた頃、よつやくひよのが口を開いた。

「あなた 誰？ 何しに……」

掠れた声は途中で勢いを失い、中途半端に空中にとどまる。

「誰だと、思う？」

頭が回り始めたシユスは口の端をわずかに上げて笑うと、左手を背中の真っ黒な翼に伸ばし、羽根を一本抜き取った。カラスの羽根なんかよりもずっと魅惑的で、見つめているだけで頭がくらくらしていくような。シユスは口の中で、小さく何かを呟いた。それは一瞬淡い光を発し、大きな鎌に姿を変えた。

「死神よ」

間合いをつめ、鎌を振りかぶる。刃が鈍色^{にびいろ}に光る……。

「いやあつ！」

ひよのが喉の限りに叫んで、横に逃げる。シユスはもう一度振り上げる。足を縛れさせて転んだひよのを、部屋の隅に追い詰める。

「いや、いや、やめて！ 何で？」

ひよのは震えながら頭を両腕で庇い、シユスの目を真っ直ぐに見つ

めた。死神の顔には相変わらず冷笑が浮かんでいた。

「どうしてそんな事するの？」

「どうしてって、仕事だからに決まっているでしょう」

シユスは嘲るよつに言つた。

「悲しく……ないの？」

さつきまでの叫びと打つて変わつて、そう訊いたひよの声は小さかつた。

「悲しい？ それこそどうして？ 私は神から仕事を貰えているのよ！ 今まで失敗した事もないしね。誇る事こそあつても、悲しむ理由はない」

「あなたの行動一つで、誰かの命が消えるんだよ？ 恐くならない？ ねえ、今まで一体何人の人を、そつやつて氣にも留めずに殺してきたの？ あなたにとつては重要な人じやなくとも、その人の存在次第で世界が変わる人だつて……」

「黙れ！」

シユスは叫んだ。

「そんなの、お前ら人間だつて同じだろう！ 自分の行動で誰かを死に追いやつているのが死神だけだと、本当にそう思つているのか？ 人間なんて、自分の手を汚さなくたつて平氣で殺しているんだよ。私達よりよっぽど卑怯じやないか。人間だつて……」

そこで、口をつぐんだ。自分の口から出て来た言葉が何を意味しているのか、わからない……。ただ、怒りだけが血管を駆け巡り、心臓をドンドンと叩いていた。いらついた時の癖で、右手首を握る。

「何か……あつたの？ 人間と、嫌な事」
恐る恐る尋ねるひよの声は震えていたが、気遣う様子が感じられた。

シユスは鎌をゆっくりと、自分の体の横に下ろす。

「わからない……覚えてないの」

ほんの少し泳いだ視線はだらりと下がった鎌の先に留まる。

「何も覚えてないのよ、死ぬ前の事なんて」

「死ぬ前？」

シュスはあと溜め息を吐いた。

「人間だったのよ、私達も」

目で先を促すひよのに、呴くように説明を続ける。

死んだ人間は死神か天使になるという事、その時に生前の記憶を奪われるという事、そしてそれを取り戻すのが生まれ変わるための条件だという事。

「もう五年、死神を続けている。期間は誰よりも長い。でも人間だつた頃の事を思い出したいとも、生まれ変わつてまた人間になりたいとも思わない」

「きっと何か、あつたんだよ。もう一度生きたいと願えなくしてしまつような事が」

ずつと黙つて聞いていたひよのが言った。

「では……」

シュスは鎌の切つ先を、震える少女の喉にあてがう。

「お前にはあるとでも？ 生きたいという気持ちが」

刃先でくすぐるように、首筋をなぞる。少女の体はびくんと震え、シュスの顔を捕らえたままの目からは涙が零れ落ちた。

「生きたい、生きたいよっ！」

シュスはひよのに視線を戻し、涙が伝う頬を、驚いて見つめた。「生きている人間の言葉を聞いてからの仕事は、調子が狂う……」
シュスが再び何かを呟くと、鎌はすっと消滅した。

「いつもは本人に気付かれない状態で執行していたから。次に命を狙つた時は、逃がさない。どんなに命乞いをされても、確実に片付ける。また姿を見せて、泣き叫ぶあなたを見ても……きちんと決着をつけてやるわ」

くるりと窓の方へ向き直り、窓ガラスに映るひよのに目をやる。

「そんなに生きたいと思わせる何かが、この世にはあると……？」

左手で黒い羽根を抜き取つて自分に魔法をかけ、シュスは姿を消

した。カーテンがわずかに窓の外へ何かに引っ張られるように揺れ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9550a/>

天使の証明～穢れなき瞳～/休載中

2010年10月9日13時35分発行